

「生」と「死」をめぐる

—死ぬことは生きること?—

金子理恵

はじめに

小さな頃、一日として同じ日がない事が不思議であった。「今日」という日はもうこないんだ、と考えるとその一日を過ごしている事が奇跡のかたまりの様に思えた。そのような一日をどう生きるべきか。まず実行した事は、祖父に勧められて始めた「一日一善」であった。その日一日一つでも人の役に立つ事をしてそれを記録する、というものだ。祖父はその行為を通して、生きている事の一つの実感を与えてくれたように思う。人の為に動くこと、それを通して自分というものを確認する事ができたからだ。

しかし、私は自分が生きている事を何かを通してではなく、自分で証明したいと思った。私たちは願ったとしても自分の顔を鏡を通さずに見ることは出来ない。だからこそ、自分の生きている実感を自分で見つけたい、と思うようになった。このような事は誰もが一度は考えた事がある。家族という一つの単位から生まれて、所属する集団が大きくなるにつれて「自分とは何者なのか」「なぜここにいるのか」などといった疑問が生じた事はあると思う。そして「生」の先にある「死」に直面したとき、それまでの経験から自分なりの人生を振り返るときが来るのだと思う。「死」に直面したときに自分の生きてきた意味を考えるのは自然な流れだろう。しかし、今生きている中で未来の生き方を模索するために生きる意味を考える必要があるのではないか。

かの孔子は「未だ〈生〉を知らず、焉んぞ〈死〉を知らんや」(『論語』先進篇)と述べている。まだ、生きている人間の道さえ知らない者が、どうして人間の「死」の事が分かるか。「死」を知ろうとする前にまず「生」を知れ、という意味のようである。この言葉はまさに今、私が行おうとしている事を言い得ているような気がする。孔子の言葉とは逆に「未だ〈死〉を知らず、焉んぞ〈生〉を知らんや」だが、敢えて今〈生きている〉中で、「死」を通して「生」を考えてみたい。

第1節 「死」の諸相

私たちは日常どのようなときに「死」を感じるのでしょうか。子供達は、今まで経験した事のないような衝撃を受けたときなど、「死ぬかと思った」などと口にする。では大人はどうであろう。立派な大人が「死ぬかと思った」とつぶやく姿はあまり気持ちの良いものではない。なぜなら大人はそれまで生きてきた経験の中から、自分なりの「生」の意味・「死」の幻影を持っているからだ。だから大人は簡単に「死」を口には出さないし、逆にマイナスと捉えてしまいがちなのである。一つには「死」とは、人との別れであるし、それを悲しむ事によってマイナスの感情を抱く事は当たり前のことなのかもしれない。

例えば典型的な例として、大人は「死ぬ」という子供の発言に対して「そんなこと冗談でも言っってはいけない」と諭す。それによって「死」に対してまっさらな子供の心には「〈死〉＝言っってはいけないこと」と映る。「死」に対して何の予備知識もない子供達は、大人によってイメージを植え付けられてしまうというデメリットがあると思う。子供が人の「死」を体験する場所とは、以前は家であった。何世帯も同居する形態が一般的であった頃には、曾祖母・祖母などの「死」を身近で感じ、学ぶ事もあったであろう。

総務省が行っている平成12年度国勢調査によると、平成12年の日本の人口は126,925,843人である。前回平成7年の調査に比べて1,355,597人、1.1%増加した。そして、世帯の家族類型を見ると、47,062,743世帯の中の58.4%を占める27,332,035世帯が核家族世帯となっている。このうち、「夫婦のみの世帯」は8,835,119世帯で18.9%を占めており、「夫婦と子どもからなる世帯」は14,919,185世帯となり、一般世帯数の31.9%をも占めている。このような数字を見ても分かる事で、また一般に言われる事ではあるが、祖父母など高齢者との同居が少なくなったことにより、子供はもとより大人も人の「死」を体験する機会が減ったと考える事は間違っていないだろう。

子供達が現在身近に接する「死」は、ペットなど動物の「死」、ゲームの中の「死」、などであろうか。こう考えると、子供は「死」から遠ざかったのではなく、人とのふれあいから遠ざかっている、という事もできるのかも知れない。

では、私たちは日常「死」を意識して毎日過ごしているだろうか。「もしかしたら、明日不治の病に掛かるかもしれない」とか、「この角を曲がったら事故にあって死ぬかもしれない」という事を考えて生活しているであろうか。少なくとも私たちの年代で健康に過ごしていれば、そのような自覚は芽生えてこないであろう。人には必ず訪れる老

いすら現実のものでないのだから。では、日常になった「死」とは、どのようなものなのか。そして、「死」はどのように日常となるのであろうか。

吉村昭氏の作品の中に「碇星」という短編集（以下、引用原文は中公文庫本——中央公論社、2002・11——による）がある。表題にもなっている「碇星」という作品は、「死」が日常になっている男性を中心とした物語である。長年勤め上げた会社で定年後嘱託職員の葬祭係として働く主人公は、「死」よりも自分が社会から必要とされていないのではないか、という疎外感に悩む。週に3回、会社に出社すると、

社員達は正面に連なるエレベーターの前に行って列をつくる。それらはすべて上方に昇ってゆくエレベーターで、かれは左方の階段に足をむけひとりゆっくり降りていった。（『碇星』191頁）

とあり、自分の状況をエレベーターで昇る社員と比べている。このような視点は未来に胸を躍らせている若者からは得られないだろう。しかし、この記述からは悲観的な感情しか得られないわけではない。自分とは違う立場を持っている人と比べても、自分なりの価値観で彼は階段を降りる事を支えにしているようにも読み取れる。

それが顕著に表れている記述として、

部屋がたとえ地下ではあっても、会社のあるビルの一隅である事には変わりはなく、定年退職すべきであるのに依然として会社に所属している事に満ち足りた気分を抱いていた。（同198頁）

という箇所が挙げられる。また、

コーヒーを飲みながら窓から外をながめっていると、会社勤めをしている実感が沸き、会社はまだ自分を必要としているのだという思いにひたる。（同199頁）

とある。これらの記述から、彼が恐れている事は日常にある「死」ではなく、社会から必要とされなくなる事なのかもしれないと思う。あまりに「死」と隣り合わせになると、感覚が鈍ってしまうのかもしれない、と考えた。しかし、その考えは間違っていたようだ。葬祭係の彼を見込んで現役時代の先輩が彼を頼みとをしたのだ。

死はいつやってくるか分からない。君に葬式の事を頼んでおきたいのだ。（同204頁）
 といった先輩の言葉も、彼にとっては日常茶飯の事で、内ポケットから手帳を取り出し、ボールペンまで用意した。

いつの頃からか、お棺に両開きのついた小窓がつくようになったが、私の葬式のときは窓のないお棺にしてもらいたい。（同204頁）

死んだあと、私は一方的に顔を覗き込まれたくないのだよ。棺についている小窓がいけないのだ。（同206頁）

この言葉からは、主人公が想像する日常化した「死」に対する恐れは感じない。しかし、妻を亡くしてからの趣味という天体観測の話になると、その先輩は、

私は、昴星だけを見る。それが自分の星のような気がしてならないからだ。その星を見つめていると、死を迎える事が少しも怖くなくなる。その星のもとに行くだけなのだと思う。死んだら棺の中で、私は昴星を見つめている。(同210頁)

と語り、日常化した「死」に対する不安を「死を迎える事は怖い」と吐露する。そして、彼は星を見る事に救いを見出したのだ。この先輩の感情を聞いた彼は、

死が(中略)日常茶飯の様に語られ、自分もそれに少しの違和感もいっていない。なにか意義深い時間が、二人の間に静かに流れているように感じる。(同210頁)

と述べている。彼にとっての日常茶飯の「死」は、やはり特別なものであった。なぜなら、その「死」はあくまでも他人の「死」で、いくらそれに慣れているとは言っても自分の「死」ではない。言ってみれば彼の思想では根本的に、自分の「死」は、世界が違うことであったのだ。先輩の言葉で日常的な「死」と、自分の「死」が同じ世界にあると気づき、それが彼の言う「意義深い」(「昴星」210頁)時間であったのだと思う。

この作品の記述から、常に「死」がどんなに日常にあっても「死」は日常足り得ないものだという事ができる。ここで見てきた日常的な「死」への不安も、その不安材料が「死」である、ということだけで私たちの毎日とそう変わらない。日常的な「死」という括りが「死」は「非」日常である、という概念を醸し出してしまったようだ。

私たちは自分でも気付かないうちに、「死」の予行演習をしているのかもしれない。私たちの体の中には必然的に「生」と「死」が組み込まれていて、そのメカニズムは終始私たちを支配している。人との出会いや別れ、素晴らしいものとの出会いや別れ。そういったものを通して、生物の別れを学び、受容する。だから、取り立てて「死」を強調して考える事はナンセンスかもしれない。しかし、「生きている」事が前提となった出会いや別れ、と「死」を前提とした別れではやはり何が違うと思う。それが日常にある「死」なのかもしれないと思うと、やはり「死」は非日常の側にある。

さて、日常の「死」と重なる部分があるが、「受け入れる死」というものは、私が一番エネルギーを必要とする、と考える「死」である。そして、それを代表するのがホスピスの問題である。私はホスピスの原点は「自分らしく」「より人間らしい」最期を迎えられるような生活環境を整えることにあると思う。その背景には、助かる見込みのなくなった患者さんに対する一般病棟の環境であったり、望んでも生命を維持するだけの機能をそろえている病院が近くになかったり、往診に対応してくれる医療機関がなかったり、と様々な問題がある。自分らしさを求める患者さんに対して、共生する環境

は決して良いものではない。そこで、自分の求めるケアを受ける事ができる場所・・・ホスピスに行き着くのではないか。

ここで浮き彫りになってくる問題点は、そのような環境を与えてあげる事の出来ない制度である。ホスピスを増やす事が重要なのではなく、「死」を自分の問題として考える事ができるものが選択できるような制度を整えなくてはならない。ホスピスの現実、水面下でこのような問題を抱えているのだ。

入院施設としてのホスピスがどんどん増加しても、可能であれば最期まで自宅で過ごしたい患者さんにとって、それは本質的な解決にはならないと思う。また、前進のように見えるホスピスの増加によって、それらの本質的なニーズが隠蔽されてしまう可能性も否定出来ない。また、ホスピスという独立した形ではなく、内科・外科などと並んで一病棟のように扱われてしまう事も、問題点ではないだろうか。ホスピスでは、医療行為よりも生活が主となる。生活する場と、病気の治癒の為に動く場は元来同じではないはずである。そして、その先はまったく別の道へと通じているのだ。これらのことから、ホスピスは病院の管理下に置かれる病棟としての位置付けにはなじまないように感じる。それではいったいどのようにしたらいいのであろうか。“人間らしく最期を迎えるべきだ”というホスピスの基本理念に立ち返ると、その答えが見えてくるようだ。「死」を受け入れて、どのように生き抜くか。ホスピスの課題は、私たちにそれを意識し考えるきっかけを与えてくれてもいいよう。

現在、日本で国が認めている緩和ケア病棟は107施設にのぼる。緩和ケア病棟の普及と前後して、一般の人々にもホスピスという名前が浸透しつつある。ホスピスという緩和ケア病棟を日本でも根付かせようと様々な働きかけを行った医師でもある山崎章郎氏によると、ホスピスとは〈家にいるような生活の場所を提供する〉場（『病院で死ぬということ』00頁、主婦の友社、1996・5）である。その場が増えるという事は、需要があるという事だが、私が大きく共感するのは、全ての状況を患者が知っている事が前提である、という点である。

芥川賞作家で僧侶でもある玄侑宋久氏は、

お経の中に、人は七日前には自分の死は分かる、少なくともなくなるちょっと前には分かる、と読めるところがある。（『文藝春秋』2002.2月号・463頁）
と言っている。患者は科学では説明出来ないような不思議な力を持っているのかもしれない。それは、玄有氏の次の言葉にも表れている。

われわれは本来持っている能力を鈍らせて生きる事でこの世に対応している部分があるというのがいくつかの宗教にあたる考え方で、私もそうじゃないかという気が

します。つまり、幼い子供と死に行く途中が、可能性が全開した一番感受性のある状態で、われわれがこうしてロジックで話している状態というのは、脳を退化させて感受性を鈍らせている面があるのではないのでしょうか。(『文藝春秋』2002.2月号・468頁)

冒頭に子供は「死」に対して先入観がない、と書いたが、ここでも同じ事が言えるのではないか。見えないはずのものが見えたり、胎内の記憶を話したりする子供の話を耳にする事がある。前世研究のパイオニアであるイアン・ステューヴンソン博士(『前世を記憶する子どもたち』日本教文社、1990・2)もそのような子供達の言葉に耳を傾け、転生の存在を提唱する。人間の力、科学では解明出来ない事も自然では起こるのかもしれない。

一方、山崎章郎氏の著書(前出『病院で死ぬということ』)の中では、「ガンの告知」というテーマも幾度となく登場する。患者がガンと理解したうえで、全てオープンな関係で残された自分の「生」を過ごす事ができるホスピスの原点では、それは必要不可欠の事である。しかし、人間は終わりの見えない「生」を見えないからこそ、生きぬく事ができる。それなのに自分の「生」の終わりを感ずる、という事がどれだけ辛いことか想像もつかない。

もちろんガンの初期段階では、「告知」が行われたとしても完治するわけであるし、以前のように「ガン＝死」というわけではない。山崎氏の著作では、家族の意志によりガンである事を伝えずにホスピスに入院してきた患者の葛藤が描かれている。同時に医師である山崎氏の葛藤も描かれている。

衰弱のきわみに達し、もう数日かと思われたある日のこと、一人で彼の部屋を訪ねた僕が、簡単な話をして彼の部屋を出ようとしたときに、彼はいきなり生きも絶え絶えの弱々しい声で、しかしはっきりと、「ところで先生、私のほんとうの病気はなんだったのですか?」と質問してきたのだ。私は意表をつかれ、うろたえた。(『病院で死ぬということ』・131頁)

彼は自分が死ぬこと、また自分が説明されている病気ではない事を感じていたのだ。この後、山崎氏は本当の病名を伝えずに彼が亡くなった事を非常に悔やむ。そこには、人間としての生活が待っている様に思える。「人間として・・・」山崎氏の著作の中で、彼は幾度となくこの表現を使う。彼がホスピス医を目指すきっかけとなった一言に、

患者がその生の終わりを住み慣れた、愛する環境で過ごす事を許されるならば患者の為に環境を調整する事はほとんどいらぬ。家族は彼を良く知っているから鎮痛剤の代わりに彼の好きなブドウ酒をついでやるだろう。家で作ったスープの香りは、彼の食欲を刺激し、二さじか三さじ液体がのどを通るかもしれない。それは輸血よ

りも、彼にとっては、はるかに嬉しい事ではないであろうか。(『病院で死ぬということ』116頁)

という話を記している。この一言で人間として生き、人間として死ぬべきであると考えられるようになったそうだ。

『竹取物語』で月に帰らなければならないかぐや姫が帝と翁に託した不死の薬をご存知だろうか。帝は結局富士の山に埋めてしまった。そのくんだり身にしみると思う。人間は人間であるから死ぬのだ。人間という役割を全うするために死ぬのだから、人間らしく死にたい。そのように考えるのは当たり前であろう。そして、そのように選択できるようになったという事が人間の進化なのかもしれないと思う。それまで、他人の「死」に重ねて描いてきた自分の「死」を自分の「死」として認識しなければいけないからだ。

さて、一般にホスピスというものをキリスト教だけの施設だと認識している方が多いようだ。発祥は中世ヨーロッパ、キリスト教精神が根底にあったようだが、もちろん、現在の緩和ケア病棟は宗教による制限があるわけではなく、何を信じても良い。日本では10年ほど前から「ピハラー」という仏教版のホスピスが誕生している。「ピハラー」とはサンスクリット語で「休息の場所」という意味である。そこでは仏教的な概念で「死」にアプローチをしていくため、自他共に「別の世界に行く」という事を実感する。自分の「死」を考えるのにこれほど整えられた場所はないと思う。

また、アメリカのホスピスでは幼稚園が併設されていて、園児達は行きと帰り、必ずホスピスの中を通過して通う。そこで人間の「死」を目の当たりにすることになる。先述の核家族の例もあり、本来の人間の生活が患者でなくとも営めるのだ。なぜなら、これまで取り上げてきた事例のとおり、本来「生」と「死」は隣り合わせだからである。

第2節 「死」ぬ事は「生」きること

「自ら処決して形骸を断ずる所以なり」という遺書を残して自殺した作家江藤淳は、最後に「妻と私」という作品を遺した。公にも「妻追い心中」などと言われる事もあるが、彼の最後の作品「妻と私」から、彼が自殺を一つの生き方として選んだ経緯を考えてみたい。

家内を孤独にしたくない。私というものだけはそばにいて、どんなときでも一人ぼっちではないと信じていてもらいたい。(『文藝春秋』1999.9月号320頁)

刺抜き地藏に参詣して、身代わり地藏のお札を頂いて帰った事があった。もとより、お地藏様が病人の身代わりになってくださるというのだが、自分が家内の身代わりを志願しているような気分になりかけて、ハツとした。(同・313頁)

本当は生と死の時間ではなくて、単に死の時間というべき時間なのではないだろうか？死の時間だからこそ、それは甘美で、日常性と実務の時空間があればほど遠く感じられるのではないだろうか。(同・320頁)

療養中の妻との時間に江藤氏が感じた「死」である。これら数多の言葉の端々から「死」のかけらを感じる。江藤氏は自分の「死」以上にこの密な時間を体感していたと見受けられるのだ。

1927年に芥川龍之介、1948年には太宰治、1970年三島由紀夫1972年には川端康成など作家が自殺する例は驚かない。詩人である吉本隆明氏が、

芥川龍之介にしろ、太宰治にしろ、どういう理由で自殺したのかという意味付けができるわけです。思想的に行き詰まっていたとか、抜き差しならない家庭の事情があったとか、女性問題とか色々いえる。(中略)それに対して江藤さんの死はそこから意味付けする事はできない。(中略)自分の死の理由は『病苦』だと自ら限定してるのです。(中略)要するに、いろんな理由をつけないでくれ、俺は病気で死んでいくんだよ。理解してくれ、と自分で閉じて死んでいくという感じがします。

(『文藝春秋』1999.9月号・282頁)

と語ったように、全てを受け入れ、それを踏まえて自分の人生を生きていったと感ずることができる。実際、江藤氏の自殺の原因が病苦であったのか、奥様を一人にして置けないという気持ちからだったのかは分からない。

ただ、自分で「死」を選ぶという事について、非常に興味を感じる。私は今まで見てきた「死」は生きることの対極にある「死」が多いと感じた。そして、その生きることは、輝いているように感じていた。だから、自然に「死」が輝いていない。暗く感じてしまう。しかし、自ら「死」を選ぶという事は幸せな事もあるのかもしれない、とも思う。先のない「死」は辛いけれど、先のある「死」は辛くないかもしれない。具体的には、江藤氏の自殺の先には願った世界が見えるのである。これらの事例から、「死」は終わりではない、という事が見えてくる。

一方、最近急増するインターネットでの自殺サイトでは2000年4月以来、アクセスが16万件を突破したという。書き込みの多くが、「生きる目的がなくなった」や「人と話す事が面倒になった」という理由だそう。ネットで知り合っただけの見知らぬ者同士が、一人で死ぬのは寂しいから、という理由で心中した事件も記憶に新しい。

様々な形態の「死」を考えてきて、唯一、目的のある「死」が、自殺なのではないか、と考えたが、自殺の中にも「生」の為に「死」ぬ自殺と、「生」から逃れるための自殺、2種類あるのかもしれない。そして、先ほどの「死」は終わりではない、という考えは

前者でなければ成り立たないものであろう。いや、前者でなければ成り立たないのではなく、より辛い死後の「生」が待ち受けているのではないであろうか。

さて、今まで見てきたように、「死」は終わりではない。だとしたら、「生」とは何であろうか。始まりなのであろうか。今〈生きている〉中での意味付けは色々な人物が様々な角度から挑戦してきた事である。先ほどの「死」に関する考察から、私は「死」の先には「生」がある、という一つの仮説を打ち出した。生きる事の意味を考えながら、「生」＝「死」について考えてみたい。

近年、未成年者の犯罪が増加している。そしてその子供達は一樣にどうして人を殺してはいけないのか？とか、何のために生きているのか分からない、などという。もっと過激になると、生まれてきたくて生まれてきたわけではない、という。私たちは意識の中にある限り、生まれるために努力を払った記憶もないし、確かに生まれたいと望んだ記憶もない。自分以外の力によってこの世に送られたのだ。だから彼らの言っている事は間違っていない気がする。しかし、生まれてきてしまった以上、私たちは何か自分の存在を示す必要があると思う。では、何のためにどう生きるのか。この問いこそ「生」に必死だった時代には誰も気にしていなかった問いだ。しかし、今の私たちは「生」そのものからは遠ざかっている、そんな気がする。次に「生」の反対にある「死」から照らされた「生」の目的を考えてみたい。

坂東眞砂子の作品に『死国』（マガジンハウス、1996・2）という作品がある。お遍路を逆に回ると、亡くなった人の命が蘇る・・・という物語だ。この作品に出てくる莎代里という少女の霊は、作品の中で、

もっと生きたかった。（『死国』320頁）

とつぶやく。

死んだら人を好きになってはいけないのか。（同325頁）

とも言う。

自分以外の人の事を大切に思ったり、幸せを願う気持ちは多くの人が感じた事があると思う。そこに自分が生きる意味を見出す事もあるかもしれない。しかし、冒頭で私が述べたとおり、自分の「生」を他人に照らして理解しようとする事は簡単だ。自分を他人に切り売りし、最後に残るものは何であろう？他人に対する愛でなければ、自分に対する愛か。

歴史的な文学の中でも特に有名な『源氏物語』の中の六条の御息所はどうか。源氏への愛と自らのプライドのために生霊になってまで源氏を愛そうとする。他者への愛に自分の存在価値を見出そうとした点では、『死国』の莎代里と同じだが、六条の御息所は

自分の為に自分の「生」を立て直そうとした。かたちとしては、齋宮となる娘の為に源氏の元から去るのだが、その真理には自分への愛があったと思う。他人に対する愛だけでは自分の「生」を全うできない、という思いから、愛する源氏の元を去ったのではないか。このことから、一様に“愛に生きる”といっても様々な形がある事が分かる。

労働を超える道は、労働を通して以外にはありません。労働自体に価値があるのではなく、労働によって、労働を乗り越える・・・その自己否定のエネルギーこそ、真の労働の価値なのです。(安部公房『砂の女』、新潮文庫153頁)

生きるって事は結局その自体を認める事になるんだ。(柴田翔『されど、われらが日々』、文春文庫194頁)

人は生きたいという事に満足するべきなのだ。(同『されど、われらが日々』193頁)

私の生きる意味はこの言葉によって裏づけられてきたと思う。哲学が生まれたときからあったこの問いをいったい何人の人間の人間が追及してきたのだろうか。もしかしたら、この問いの為に哲学が生まれたのかもしれない。「生」きること～その事の答えは、生きぬく事にあるのかもしれない。

私の中の25年間を考えると、その空虚に今さらびっくりする。私はほとんど「生きた」とはいへない。鼻をつまみながら通り過ぎたのだ。(中略)私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまわないかといふ感を日増しに深くする。日本はなくなってその代わりに、無機質な、空っぽな、ニュートラルな、中間色の富裕な、抜け目のない或る経済大国が極東の一角に残るであろう。それでもいいと思っている人たちと、私は口を利く気にもなれなくなっているのである。(『産経新聞』1970.7.7)

1970年の11月25日に割腹自殺を図った三島由紀夫が、同年7月7日に産経新聞に掲載した最後の文章である。「生」に対する諦め、失望が綴られている。この文章から感じる事は、彼自身の生き方が、世の中の大部分の人間とは異なっている、ということ。そして、「死」が「生」以下に扱われている、ということである。

慷慨して死に赴くは易し、従容として義に就くは難し。(諸橋徹次『中国古典名言辞典』527頁・謝枋得『卻聘書』の言葉、講談社学術文庫)

これこそ、まさに三島由紀夫に聞かせたい言葉と思う。時代や政治に憤慨して深く「死」ぬ事はまだ簡単である。しかし、冷静に事の前後を考え、誤りなく義に叶う行動を取る事は難しい。「死」ぬ事は易く、「死」ぬ思いで生きる事は難しい、という意味である、

以上のことから、私が興味を持った箇所は、「生」きている事に疲れたら「死」を選ぶのか、「死」はそんなに楽なものなのか、ということだ。先に自ら選ぶ「死」につい

て述べた。苦しみの中で、苦しんで「生」き続ける事を選ぶ「死」と、苦しみから逃れようとする「死」。前者は「生」と同じくらい苦しいものであろう。だから、「生」と「死」が同じレベルで語り得る事になる。しかし、後者の「死」は「生」以上に苦しいのではないかとそんな気がする。「死」に対する目的を抱いているのではなく、「生」から逃れる事が目的なのだから本末転倒であるし、楽な道を選んだ人間にとって、楽な道などないからである。私は様々な事を直接感じたい、と考えてきた。それらのことから、この「生」きる目的も、「生」きること自体を全うする事である、と考える。

今まで見てきたように、私たちの周りには様々な「生」と「死」が混在している。知らないところで誰かが「生」まれ、誰かが「死」んでいる。私が「死」とは何か、「生」とは何か、を考え始めてから、様々な人の人生観を垣間見てきた。その中でも印象的であった一つの「遺書」の言葉がある。

悠々たるかな天壤 稜々たるかな古今

五尺の小軀を以って この大をはからむとす

ホレーシヨの哲学竟に何等のオーソリティーに値するものぞ

万有の真相は唯一言にて悉す。

曰く「不可解」

この恨みを懐いて、煩悶終に死を決す

既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安ある無し。

初めて知る、大なる悲観は大なる楽観に一致するを。

これは、1903年6月22日に華嚴の滝で投身自殺を遂げた藤村操が、松ノ木に掘り込んだ遺書である。彼は、何のために生きているのか、という事を考え続けたけれども、結局答えが見つからなかった、その為に「死」を選んだ。そして、「大なる悲観は大なる楽観に一致するを」と述べたのだ。彼は最期に「生」きる事と「死」ぬことが繋がったのだろう。そして、生きる事の意味を理解して生き抜くために「死」を選んだと思う。

中国の古典には味わいの深い名言が多いが、「生」と「死」に関しても例えば『荘子』徳充符篇(『中国古典名言辞典』350頁)には、次のような言葉がある。

死生を以って一条と為し、可不可を以って一貫と為す。

人生を超越した立場にある人間の死生観の一つを言い表したもので、「死」と「生」は別のものではなく、一本の綱であり、また可と不可、所謂是非善悪は一つの同じものである、とする。このような観点に立つものは、もはや人生を束縛するなにもものない。このような無為自然を説く荘子とは相対する観点からの言葉も勿論あり、本稿の冒頭に掲げた儒家の祖・孔子の言葉に代表されるように、根本的には道家と儒家の違いだが、

有名な王逸少の「蘭亭記」に、「死生を一にするは嘘誕為り」（『中国古典名言辞典』556頁）という言葉もある。「死」も「生」も同じだ、と説く人がいるがそんな事は嘘である、と喝破する。

もしかしたら、このとおり「生」と「死」は同じではないかもしれない。しかし、私はこれまでの考察から、確かに「生」と「死」は一本の綱である、と思う。綱というよりもむしろ一つの環のように感じられる。「生」が始まりでもなければ、「死」が終わりでもない。始まりと終わりはその人自身に委ねられている、そんな気がするのだ。

おわりに

「〈生〉は奇なり、〈死〉は帰なり」（『中国古典名言辞典』585頁『十八史略』「夏后氏」）という言葉がある。人生はこの世を身を寄せる仮の宿としているだけであり、死ぬと云うのは故郷へ帰るようなものである、という意味だ。

私が考えてきた切り口とは全く違った穏やかさがある。本来の「生」と「死」には、このような穏やかさがあったのだろう。静かに生まれて静かに去っていく。そして、人生は現世の仮の宿。

日常の忙しさに紛れ、“人間として生きる”事の心地よさを忘れかけている私たちは、その心地よさを非日常に求めている。しかし、本来の“人間らしさ”は、私たちが自分の置かれている現実をしっかりと見据えることだと思う。現実を抜け出しても決して状況は変わらないのだ。私たちが私たちの進化を誇りに思い、受け入れて更なる飛躍を目指すことこそ、古来より受け継がれてきた“人間らしさ”なのだと思う。

もし、地球上に発生する人間の数が決まっていて、私たちは常に転生を繰り返して生きてきた、という事が証明されたら、私たちはどうなるのであろう。もし、そのような世界であったら、私たちは進化をする事が出来なかったと思う。「今、私たちが生きている世界を受け入れよう」と考えることこそ人間らしい生き方であり、本来の姿である。

(2003年 卒業)